

福音主義神学の基盤を点検する

— 今後の営みに向けて —

(日本福音主義神学会西部部会秋季研究会議講演要旨)

2013年11月18日
於 関西聖書学院
担 当 市川康則
(神戸改革派神学校)

序. 問題への視点—日本福音主義神学会 (JETS) 設立の背景と目的から

- ・「福音主義神学」とは何かは、二つの問題を含む。一つは「神学」とは何か、もう一つは「福音主義」とは何かである。ここでは一応、神学を、御言葉啓示（聖書聖典）に規定された、御言葉啓示（聖書聖典）についての理論的（学術的）認識としておく。ここでは「福音主義」について主として論考することにする。
- ・「福音主義」の定義は実際的にも、本質的にも容易ではない（本質的には端的に不可能である）。「福音主義」は教会史上、対立項（反福音的立場）が生じたときに、その時々教会が聖霊の導きの下に聖書に照らして確認してきた事柄であり、その意味で相関的な—決して相対（主義）的ではない！—概念であった。福音とは端的に神の御言葉そのものであるが、とりわけ救済における神の主権と恩恵を強調する表現で、福音主義は救済におけるあらゆる人間中心主義（律法主義、合理主義、経験主義、敬虔主義、神秘主義・・・）と対立する立場である。問題は、我々が直面する、否、我々の内に残る反福音主義—総括的に「律法主義」と呼ぶ—が何であるかを的確に知ることである（勿論、律法、合理〔性〕、経験、敬虔そのものが福音と対立するのではなく、それらの各々中心視、絶対視する「主義」が「福音主義」と対立するのである）。
- ・福音が神の御言葉それ自体であれば、福音をそれ自体として特定する（identify; pin down）することはできない。神は永遠・無限の存在であり、神の言葉もそれ自体においては人間の理性も感性もはるかに超えており、とうてい測り知る（define; delimit[ate]）ことはできない。神が人間の受容・理解能力の範囲内で啓示して下さる限りにおいて、我々は神の言葉を知り得るのである（これを否定して、人間の理解力に神の言葉を閉じ込めて神を知ったと言うのは、合理主義的偶像礼拝である）。
- ・上記の福音（主義）理解とその継承のために、JETS創立の背景と目的を確認することは重要、かつ実際的にも近道である。

1. JETS創立の背景と目的

- ・ JETS規約
第三条（立場）「本会は聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つ。」

第四条（目的）「本会は前条の立場に立って、神学的研究を行い、相互の交流をはかり、教会の健全な成長と発展に奉仕することを目的とする。」

- ・ “破壊的” 聖書批評学の席卷に抗して、聖書信仰に堅く立ち（聖書の十全靈感）、しかし反動に陥ることなく、学問としての神学の正当な位置と役割を重視し（神学研究）、福音としての聖書に生き、生かされるべく（相互の交流、教会の健全な成長と発展に奉仕）結成された（1970年1月26日、練馬バプテスト教会にて設立発起人会、同年4月27日、設立総会。正会員86名、準会員3名、名誉会員11名、合計100名。神学のための神学ではなく、また、神学なき信仰生活—福音宣教と教会形成—でもない立場）。
- ・ 70年代の問題とその後—聖書観・聖書論について

聖書の文献性への独占的関心に規定された聖書批評学への批判（と反動？）から聖書の（文献性を十分に了解しつつ）聖典性への根本的確信に基づく聖書研究や神学研鑽を強調したが、その際、聖書の「十全靈感」（救済的十分性の意味の無謬性 [infallibility]）は、JETSに賛同、入会する者たちの共有事項、かつ不可欠条件となった。
- ・ しかし、十全靈感の性質や射程が問題となっていた。科学や歴史上の事柄においても、聖書の記述は情報として正しく、十分であるのか、あるいは、そのような次元では不十分、ないし不正確であり得るのか（但し救済においては無謬）が問題となった。一方で、そうした次元でも聖書は誤りがなく、十分であることを主張するグループと、そうした次元は—究極的には聖書の権威の下に取り扱われるべきであるが—聖書の直接の使信ではないというグループが生じてきた。前者は（無謬性に加え）無誤性 (inerrancy) を主張するが、後者はそれを採らない（1978年10月に聖書の無誤性を主張するシカゴ声明が採択されたが、これは前者への大きな支えとなっている）。
- ・ 但し、現在では福音主義陣営にも健全な聖書批評学の在り方を模索、実施する者も増えてきているように思われる。半世紀前の批評的諸説が批評学者間でも批判、修正されていることが、その一つの要因である。聖書学を含む神学の学問性—信仰とは区別される学問としての自由と、信仰に規定される学問の責任—が正当に受け止められ始めてきているようである。
- ・ JETSにとっての今後の不可避的課題として、1) 神の言葉としての聖書の存在論的権威（性）と、人間的限界から来る聖書の認識論的制約との相関性についての理解—神の言葉が我々に対して有意味であるためには、我々自身の解釈が不可避である（聖書真理は我々には決して自明ではない [典型例：三位一体の教理]）、2) 聖書使信の中心と射程の相関性の理解—聖書の直接の目的と機能と、間接的、究極的目的・機能との異同・相関性（無謬性と無誤性の論争の適否を含めて）、3) 「靈感」と「無謬」の実質的意味は？—一人の言葉となった神の言葉（受肉とのアナロジーか [神が人となる＝キリスト論的事態]、聖霊降臨とのアナロジーか [人が人のままで神の器とされる＝聖霊論的事態]。三一論的聖霊論の不可欠性）。

2. “福音主義”の意味合いをもとめて—反福音主義との対峙において

- 福音（主義）定義は困難（むしろ不可能）であるが、歴史に現れた反福音主義との対峙・対決において、福音（主義）に限りなく接近、近似しなければならない。福音の「定義」が不可能なのは、神の認識不可能性（incomprehensibility）による。“絶対者”なる神を、そのいますぐのままに（as He is）知ることは、人間には不可能（また不必要でも）である（有限は無限を把握し得ず [*Finitum non possit capere infinitum/Finitum non capax infiniti*]）。反福音主義をここで網羅することは不可能である。概括的に述べるなら、1）古代（以来）の異端（反三位一体論、反キリスト二性一人格論等々）、2）全時代に現れ得る律法主義（自力救済の立場—結局は神の基準を人間の次元に降下させる自己満足）、3）中世ローマ・カトリック神学の（しかしプロテスタント神学にも残存する）スコラ主義（創造と救済の自然・恩寵の二元論的理解、救済における神人協力説等々）、4）近代の反形而上学的性質の合理主義（理神論、汎神論、道徳神学等々）、5）合理主義への反動としての（しかし、根幹部分では理性主義〔人間中心主義〕）、6）合理主義・自由主義双方への反動としての実存主義（しかし、根幹部分では反理性的、感性的人間中心主義）が挙げられるであろう。さらに、7）狭義の改革派・長老派から、狭義の「福音派」と同義的に「福音主義」が挙げられるが、その場合の福音主義は概ね個人主義・内面主義・実践主義を特徴とする（この場合、彼らは、自分たちは福音主義〔＝福音派〕ではないと自認する）。
- 宇田進「福音主義」（宇田進・他編『新キリスト教辞典』いのちのことば社、1991年）に「福音主義」についての総括的な記述が見られる。福音主義の中心をなすものとして、1）原点としての使徒的キリスト教、2）古代教会の正統信仰（四大共同信条）、3）福音主義との歴史的表明としての16世紀宗教改革（聖書のみ、信仰義認、聖徒の交わりとしての教会）、4）16、17世紀の福音主義。
- 福音主義は上記諸派・諸傾向に対峙しなければならないが、もしそれらに真理契機（一面の真理性）があれば、それらに反動的になることなく—反動は同じ原理の焼き直しに過ぎない—、その契機を批判的に昇華し、福音主義の立場からそれを生かし直す—一旦十字架につけ、復活させる—ことが必要である。同時に、聖化が未完成である以上、福音主義を自任する我々もまた反福音主義（伝統を固守する自己満足）に陥り得ることを自戒しなければならない。
- 「福音主義」理解（概念規定）については、傾向として、最大公約数的な捉え方（例えば、古代四大共同信条および宗教改革諸信条の共通点に注目）と最小公倍数的な捉え方（細部に亘る一致を追及）があるように思われるが、前者は福音主義をブロードに捉え、弛緩させかねず、後者は福音主義をストリクトにとらえ、硬直させかねない。
- 福音主義は図式的、総括的に言えば、一方で（啓蒙主義神学を含む広義の）自由主義に、他方で教会伝統主義に対峙する。前者は学問研究を重んじ、聖書を古典文献として解釈し、その教説を同時代の思想として構築する。後者は確立した教会教義と制度の伝統に規定されて、聖書を解釈し用いる。これに対して、福音主義は人間理性と教会伝統とを聖書の権威の下に

置き、聖書をキリストの福音として告白し、キリストの救済の適用者なる聖霊の導きに身を委ねて解釈すべく努めてきた—この前提で、理性を用い、伝統を重んじることは可能、かつ必要でさえある。福音主義はまた根本主義とも異なるが、しかし、聖書を最重視するがゆえに、根本主義への傾きを示すこともある。

- ・聖書自体は永遠不変の神の言葉であり、その教説内容は神から与えられたものであるが、しかしながら、その教説は常に、神学研鑽を経た教会の信仰告白として表現され、確認される。そして、この研鑽・表現・確認は不可避免的に特定の文化的制約（学問や技術の水準、社会的習慣等々）、および所属教会の伝統の力を被っており、決して中立、無前提ではなく、ましてや永遠・不変ではない。聖書は常に新たに告白され、表現され続けなければならない。

3. 福音に生かされる—福音主義の本質

- ・福音主義とは端的に福音を固守すること、福音を知的次元において正しく理解することに留まらず（学問のための学問ではなく）福音それ自体の要求に従うこと—それに生かされること—を伴う（むしろ、そのために福音を知的に正しく知ることが要請される。福音への「能動的」態度に先立つ「受動的」態度）。JETS規約第四条（目的）はそれを明確にしている。
- ・福音が要求することは、包括的に言えば「宣教」による神の国の進展・成就である。自分自身が福音を聞き、生かされ（救われ）、福音を聞く人々に同じことが起こり、彼らが共同体を形成し、社会に霊的感化を及ぼし、多くのキリスト者が諸領域に輩出して、福音がそれら諸領域にて結実し、こうして神の支配が及んで行くことが、福音自体の—復活のイエス・キリストご自身の—約束かつ要求である。
- ・福音主義の「定義」が不可能であるとは、換言すれば、福音—「神の」言葉—を自派伝統に完全に打ち込む—まさに人間化する—ことができないということである。それゆえ、すべての教派・学派は限りなく福音に接近すべく努めなければならない。そこに、異なる諸伝統が対話し、「律法主義」に対して“共”闘することが可能となり、かつ求められる所以がある。そのために、各教派・学派は歴史的に獲得して来た自派伝統を—神学であれ、典礼であれ、教会統治であれ、個人生活であれ—絶対化、固定化するのではなく、御霊の導きの下に、御言葉に従って不断に改革され続けなければならない（聖化の未完成はすべてのことに当てはまる）。伝統の改革・変更が信仰の放棄であるかのような強迫観念から解放されるべきである（絶えず改革され続けるが故に、改革[派]教会—あるいは「宗教改革的」教会—である *ecclesia reformata est, quia semper reformanda*）。
- ・諸教派・学派は各々に、また相互に、キリストの福音（聖書聖典）への堅固な確信に基づき、絶えず越し方を回顧、確認しつつ（溯源＝過去志向）、神の国の終末的進展と成就に献身する中で、それに向けて自己適合（自派伝統の改革）に努めるべきである（希求＝未来志向）。これこそ、エキュメニズムの基礎と目的である。教会がそうであるように—そうであればこそ—それに奉仕する神学研鑽も“エキュメニカル”なのである（古代以来の教会会議）。

- ・ J E T S 自体は教会ではなく、また事業団体でもなく、学会に他ならないが、しかし、福音の約束に依拠し、その要求に従う学術団体である。他の立場からの誠意なき批判・揶揄—初めから実践的なことを目論む非学問的団体など—は気にすることはない（但し、真理契機には注意すべきである）。そもそも人間学問は人と社会の悪の除去という実際上のニーズから起こり、発達したからである（A・カイパー）。勿論、さらなる発展を目指した、ある段階での「学問のための学問」は必要であるが、原理的、究極的には、人間学問（human science）は人間生活（human life）のためにある。この確信を失ってはならない。蛇足ながら、世のいわゆる学者、とりわけ非福音的な聖書学者・神学者は、何のためにそれをしているのだろうか（仕事のためか）。

結び.

- ・ 福音主義神学とは、人が福音に生かされるために—福音の宣教によって神の国が終末的に進展し成就するために—営まれる、御言葉についての信仰的、論理的学術研究である。そのために、相互研鑽を経て自己改革する努力を怠ってはならない。